

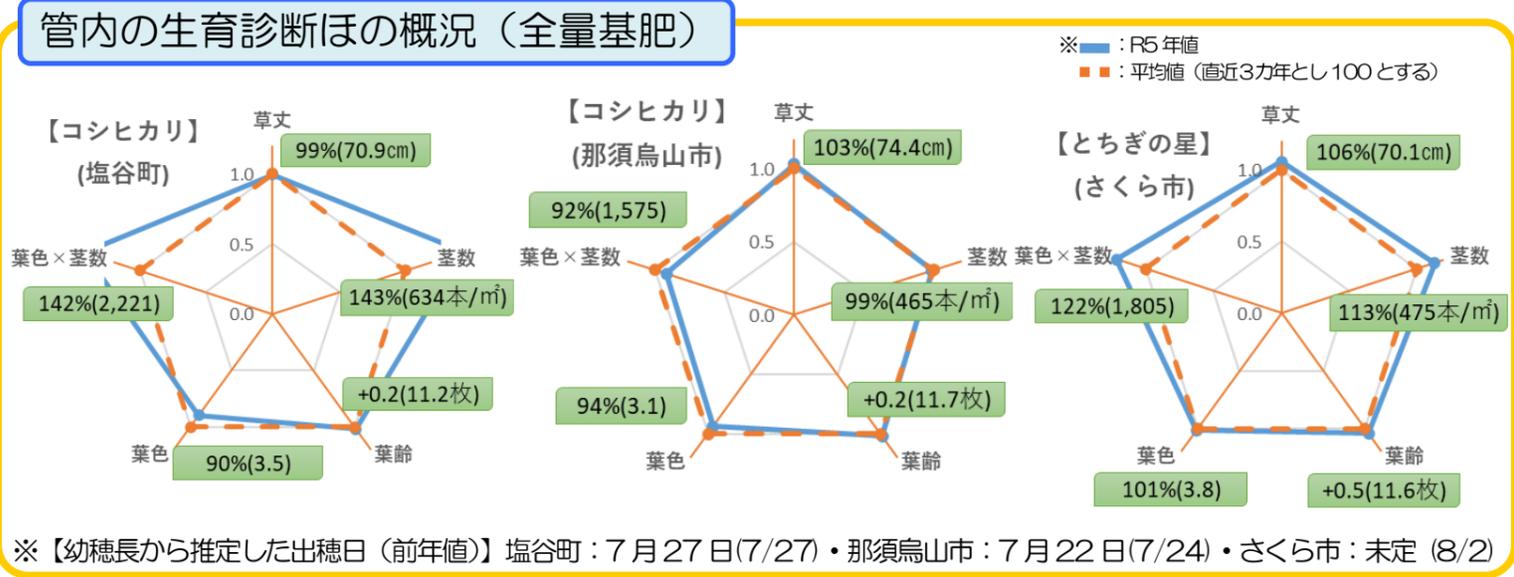
稲・麦・大豆かわら版

2023.7.10発行
 栃木県塩谷南那須農業振興事務所
 0287-43-2318
<http://www.pref.tochigi.lg.jp/g55/>

管内生育診断ほの早植コシヒカリ・とちぎの星生育状況（7月6日調査）

○ 前年に比べ、草丈はやや長く、莖数は並～やや多く、葉色は前年並、葉齢は0.3～1.0程度多く、幼穂長から推定した出穂は3～4日程度前年より進んでいる状況です。

<気象> 向こう1か月予報では、気温は高く、特に期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。今後の気温が平年並に経過した場合、出穂は前年より2～4日程度早まる予想です。



今後の管理

適切に水管理、穂肥、病害虫防除を行きましょう
 生育が進んでいるので、追肥体系では穂肥時期が遅れないよう注意しましょう。

水管理

田植後1か月程度で必要莖数が確保されたら**間断かん水**

- ◆ 最高分げつ期から落水時期（出穂後30日以降）まで**間断かん水**を基本に行いましょう。
- ◆ 低温（出穂前7～14日の減数分裂期に平均気温20℃以下）が予想される場合は、幼穂の位置に合わせて深水管理（15～20cm）を行いましょう。
- ◆ 出穂期は最も水を必要とする時期なので、こまめな間断かん水としてください。異常高温時には、かん水などにより地温の低下を図ってください。
- ◆ 前作麦の稈をすき込んだほ場は、早めに間断かん水を行ってガス抜きし、土壌還元による生育障害が発生しないよう注意してください。

出穂期の判断と追肥

- ◆ 平均的な生育をしている株の主茎（最長茎）を抜いてカッター等で2つに裂き、幼穂長を5～6本測定する。

出穂までの日	20	18	15	10
幼穂長(cm)	0.4	0.8	1.7	7.3

斑点米カメムシ類対策は除草・薬剤防除が基本

- ・イネ科雑草やホタルイ等の雑草は、斑点米カメムシ類の好適な餌です。
- ・雑草は①水田内への誘因源、②侵入するための中継点、③幼虫の発生源となります。
- ・雑草を減らし、カメムシ類が侵入・増殖しにくい環境を整えて斑点米の発生を防ぎましょう。

1. 水田周辺の除草をする - 畦畔連続2回草刈り -
 連続2回草刈りが被害低減に有効です（下図参照）。草刈りによるイネ科雑草の出穂抑制は最大3週間です。2回目の草刈りが遅れないようにしましょう。
 ※上記の草刈りができない場合でも、必ず出穂期10日前までに草刈りを済ませましょう。

2. 薬剤防除をする
 穂ぞろい期に斑点米カメムシ類が水田内に確認できる場合、また被害の常発地では、穂ぞろい期～乳熟初期（出穂期7～10日後）に液剤又は粉剤を使用して防除を行いましょ（下図参照）。粒剤は、出穂期～出穂期の7日後までに散布しましょう。※その後も発生が多い場合は、7～10日間隔で1～2回追加防除が必要です。

(早植コシヒカリの場合)

（農業環境指導センターURL）
<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>

<穂肥の施用(コシヒカリ分施肥体系の場合)>

- ◆ 穂肥施用は、ほ場ごとに生育にばらつきがあるので、幼穂長により出穂前日数を把握し、施用時期を決定しましょう。
- ◆ 生育量が過剰の場合は、施肥時期をやや遅らせ、施肥量もやや控えましょう。

◎全量基肥施肥栽培において、出穂前10日頃に葉色が3.0以下（コシヒカリ）の場合は、速効性の肥料で窒素成分1～2kg/10aを出穂期前までに施用しましょう。

稲こうじ病に注意しましょう

感染好適条件：穂ばらみ期の低温・降雨で発生が多くなる。前年発生が見られたほ場では注意。

対策：出穂15～20日前に薬剤散布を行う。（モンガリット粒剤は紋枯病との同時防除で早い時期から散布可）

薬剤名	希釈倍率 又は使用量	使用方法 (散布液量)	使用時期	備考 RACコード
ドイツボルドーA	2,000倍	散布(60～150ℓ/10a)	出穂10日前まで	M01
Zボルドー粉剤DL	3～4kg/10a	散布	出穂10日前まで	M01
ブラシフロアブル	1,000倍 8倍	散布(60～150ℓ/10a) 無人航空機散布(800ml/10a)	収穫7日前まで	U14 16.1
モンガリット1粒剤	1kg/10a	湛水散布・無人航空機散布	収穫45日前まで	3